

松 山 大 学 論 集  
第 23 卷 第 5 号 抜 刷  
2 0 1 1 年 12 月 発 行

「ロジャー・マルヴィンの埋葬」における  
強迫観念とその背景

—— フィリップ・フレノーの「インディアンの墓地」を手掛かりに ——

辻 祥 子

# 「ロジャー・マルヴィンの埋葬」における 強迫観念とその背景

—— フィリップ・フレノーの「インディアンの墓地」を手掛かりに ——

辻 祥 子

## 序

ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) 作「ロジャー・マルヴィンの埋葬」(“Roger Malvin’s Burial”) (1831) は、開拓時代の森を主な舞台とし、先住民との抗争を繰り返す辺境の白人の心理を取り上げている点で、50年近く前に世に出たフランス系移民フィリップ・フレノー (Philip Freneau) の詩「インディアンの墓地」(“The Indian Burying Ground”) (1787) と共通点を持つ。ホーソーンが実際にフレノーの詩を読んだことを示す証拠はないが、当時のアメリカ人の間で広く知られていたこの詩が、ホーソーンに何らかの創作のヒントを与えた可能性はある。本稿ではフレノーの「インディアンの墓地」を手掛かりにして、ホーソーンの「ロジャー・マルヴィンの埋葬」に描かれる辺境人ルーベン・ボーン (Reuben Bourne) の苦悩、彼に取り付く強迫観念について、考察を深めたい。

ここで、ルーベンの強迫観念とはどのようなものなのか、一つの仮説を提起しておきたい。彼は、先住民との戦いのあと、瀕死の重傷を負った義父ロジャー・マルヴィン (Roger Malvin) を森に残したまま、一人村に生還する。そこで、恋人でありロジャーの娘でもあるドーカス (Dorcus) には、自分が義父の最期を看取り、埋葬したと嘘をつき、彼女と結婚する。以来ルーベンは、義父を置き去りにした罪と妻に嘘をついた罪、これら二つの罪の秘密を心の中に封

印し、悶々とした日々を送ることになる。彼が良心の呵責から逃れる道はただ一つ、森に戻り、ロジャーを埋葬することであった。

それができない理由として語り手はまず、次のように説明する。「長い間先送りにしていたロジャー・マルヴィンの埋葬の手伝いを、いまさら彼の友人たちに頼むのは遅すぎる」。しかし注目したいのは、その直後に続く事情である。

それに辺境人ほど迷信からくる恐怖を感じやすい者はいなかったのに、ルーベンは一人で行くことができなかった。

...and superstitious fears, of which none were more susceptible than the people of the outward settlements, forbade Reuben to go alone. (25) (以下、下線は筆者による)<sup>1)</sup>

どうやら埋葬行為に関して重要な障害となっているのが、この「迷信からくる恐怖」のようである。

この恐怖には二通りの解釈ができる。まず物語が、先住民が大量に虐殺されたことで有名なラヴェルの戦い(1725)の直後に設定されていることから、彼は森の中に無数に漂う先住民の亡霊に怯えていると考えられる。さらに、死んで骨と化しているはずの義父が、いつまでも座って自分を待ち続ける姿を想像しては震えおののく。こうした恐怖はいずれも、白人と先住民のはざまにいる辺境人だからこそいっそう「感じやすい」といえる。あとで考察するように、彼らは、生者と死者の交流を信じる先住民の死生観を持ちながら、一方でそれを「迷信」と断じ、両者の世界を厳格に区別するキリスト教徒の死生観にも縛られ、生と死の境界に漂う亡霊にひどく恐怖を感じるのである。

ルーベンを苦しめるものとして、二つの脅迫観念、つまり、先住民の亡霊に対する恐れと、義父の亡霊に対する恐れがあり、その背景として、白人による先住民虐殺の歴史と、先住民と白人キリスト教徒の死生観の相克がある。この二つのテーマは、フレノーの「インディアンの墓地」の中ですでに扱われてい

る。フレノーからホーソーンへ、どのようなテーマ上のつながりや発展があるのかを明らかにしていきたい。

## 1. 先住民の亡霊

最初はルーベンと先住民の亡霊との関係に注目する。まずはフレノーが先住民虐殺の歴史をどのように扱い、それがホーソーン作品とどうつながるのかを見ていく。ここで、フレノーの詩について簡単に紹介する。合衆国初の定期刊行物である『アメリカン・ミュージアム』(*The American Museum*)は、創刊の年となる1787年、憲法のフルコピーとともに、先住民の死をテーマにした3編の詩を掲載したが、「インディアンの墓地」はそのうちの1つであった。そこには、アメリカの啓蒙運動の発展と同時に先住民は消滅するという明確なメッセージがこめられていた。しかしこの詩には一方で、先住民の存在が、白人の理想とする啓蒙主義思想そのものに暗い疑念を投げかけ、想像の中で亡霊となって、白人に復讐をしかけてくることも暗示されている。そのことがわかる詩の後半を引用したい。先住民の墓地を訪れた白人の詩人が、かつてここで暮らしていた彼らに思いをめぐらす場面である。

ここには、いまだに聳え立つ岩が残っている。

好奇心から目をこらすと、

その上には、我々より粗野な人種（先住民）の空想が描かれている。

（今は、雨に打たれて半分は消えてしまっているが）

Here, still, a lofty rock remains,

On which the curious eye may trace

(Now wasted half by wearing rains)

The fancies of a ruder race.

ここには、いまだニレの老木が上に伸びている。

その遠くまで突き出した枝の影で、  
 (それは、その牧師がなお、すばらしいと賞賛しているものだが)  
 森の子供たちは遊んだものだ。

Here still an aged elm aspires,  
 Beneath whose far-projecting shade  
 (And which the shepherd still admires)  
 The children of the forest play'd.

そこに、今なおイライラと落ち着きのないインディアンの女王  
 (髪を編んだ、青白い乙女)と、  
 多くの野蛮人たちがしばしばやってきて、  
 長居をしている男をとがめ、出て行くよう促すのだ。

There oft' a restless Indian queen  
 (Pale Marian, with her braided hair)  
 And many a barb'rous form is seen  
 To chide the man that lingers there.

真夜中の月に照らされ、みずみずしい夜露の上を、  
 狩人は未だその鹿を追う。

狩人、そして鹿、それは一つの影になる！

By midnight moons, oe'r moist'ning dews ;  
 In vestments for the chace array'd,  
 The hunter still the deer pursues,  
 The hunter, and the deer—a shade !

そして臆病な空想は、長い間、見ることになるだろう  
 体にペンキを塗った酋長と先のとがった槍を

そして理性そのものは、ここにある無数の影や妄想に対して跪くであろう

And long shall timorous fancy see

The painted chief, and pointed spear,

And reason's self shall bow the knee

To shadows and delusions here.

[Freneau 1787 年版] (Bergland 39-40)<sup>2)</sup>

この詩の背景として、先住民との戦いがあり、舞台装置として、先住民が刻んだと考えられる文様の岩や枝葉を広げて木陰を作る大きな木が置かれている。すでにここに「ロジャー・マルヴィンの埋葬」との類似点が見られるのだが<sup>3)</sup>、この詩でとくに注目すべきは、虐殺された無数の先住民の亡霊が「そこに長居する」白人に対して、出て行くように促している場面である。“chide”という言葉は「“scold”より穏やかで冷静なしかり方」(ジーニアス大英和辞典)だが、穏やかな分、抑制された怒りが込められているといえる。レニー・L・バーグランド (Renée L. Bergland) は、そこに「復讐に燃える亡霊の呪い」(42)を読み取る。白人のほうはというと、最後のスタンザにあるように「理性が、ここにある無数の影や妄想に対して跪くとき」、恐怖に駆られるのである。

こうした先住民の亡霊に対する白人側の恐怖や強迫観念は、18世紀後半から19世紀半ばにかけて、多くの文学作品の中に投影されている。バーグランドは、フレノーの詩をはじめとし、チャールズ・ブルックデン・ブラウン (Charles Brockden Brown)、ワシントン・アーヴィング (Washington Irving)、ジェイムズ・フェニモア・クーパー (James Fenimore Cooper)、リディア・マリア・チャイルド (Lydia Maria Child)、そしてホーソーン の作品を取り上げて、その共通テーマを分析している。とくにホーソーン に関してバーグランドは、「彼は先住民兵士の亡霊に取りつかれ、まさにその亡霊になりきって、亡霊小説を書いている」(157)と評している。しかしながらそのバーグランドも、「ロジャー・マルヴィンの埋葬」に関する考察はわずか数行で終わらせている。

「ロジャー・マルヴィンの埋葬」こそ、先住民の幻影が随所に見え隠れし、それに白人の主人公が呪縛され苦しむ姿が描かれている。この点を詳しく見ていきたい。

舞台は、先述したように、先住民を容赦なく殺した「ラヴェルの戦い」(18)の直後の辺境地である。これについて次のような記述がある。

この戦いは多くが戦死する悲惨なものではあったが、敵の部族を弱体化させ、その後数年にわたって続く平和をもたらしたから、その地方にとっては、さほど不幸なことではなかった。

The battle, though so fatal to those who fought, was not unfortunate in its consequences to the country; for it broke the strength of a tribe and conduced to the peace which subsisted during several ensuing years. (18)

しかし逆に言えば、平和は数年しか続かなかったし、戦いが「さほど不幸なことではなかった」かどうかは極めて疑わしい。実際、辺境人たちは戦いが再び始まることを予期しており(26)、片時も心の休まることはなかったはずである。一方で、過去の先住民虐殺の記憶は、彼らの脳裏に深く刻まれている。

具体的にロジャー・マルヴィンとルーベン・ボーンの場合をみていくと、まず、彼らが今いる森には死の匂い、亡霊の影が漂っていることがわかる。徐々に弱ってきているマルヴィンについて次のような語りがある。

「死」は、死体がゆっくりと近づいてくるように、こっそり一步一步森の中を彼に向かって進み、そして木陰伝いに少しずつ少しずつ距離を縮めながらその木の陰から青ざめた能面のような顔をのぞかせることでしょう。(23)

Death would come like the slow approach of a corpse, stealing gradually towards him through the forest, and showing its ghastly and motionless features

from behind a nearer and yet a nearer tree. (23)

「死体がゆっくり近づいてくるように」とは、考えてみればおかしな話である。死体は、元来動かないものである。ここで「死」の顔が“ghastly”と形容されていることに注目したい。これは「恐ろしい、ぞっとする」という意味の形容詞だが、もともと亡霊＝ghostの派生語である。ここでは死がマルヴィンに迫りつつある様子と、亡霊が近づいてくるイメージが重ねられているのではないか。さらに、マルヴィンがルーベンに自分を置いて村に帰れと命じながら、自分でも動揺を隠せないという場面で語り手は次のように言う。

荒野で死にゆくまま放置されるということは、恐ろしい運命だった。

It was a ghastly fate to be left expiring in the wilderness. (21)

ここでも、そういった荒野における死と亡霊のイメージが結び付けられている。つまり、単なる死の恐怖だけでなく荒野の亡霊に脅かされる恐怖を味わう運命だからこそ、“a fearful fate”ではなく“a ghastly fate”と呼ばれているのではないのか。

今度はルーベンの恐怖の正体をはっきりさせるために、荒野から何らかの影響を受けたルーベンの顔色が蒼白だと言及されているところが2か所あることに注目したい。荒野から戻って結婚したルーベンの表情は次のように表されている。「新郎の顔は青白かった (pale)」(25)。さらに、最後に荒野で誤って息子を撃ってしまうルーベンの顔は、「彼女の夫の顔は恐ろしく青白かった (ghastly pale)」(31)と描写されている。これは何を意味しているのか。当時北米先住民が白人のことを“pale-face”と呼んでいたのはよく知られているが、オックスフォード英語辞典(OED)によると、そのことに初めて触れているのが1823年に書かれた西部開拓者による手紙である。さらにその3年後の1826年には、クーパーが『モヒカン族の最後』でこの表現を用いている<sup>4)</sup>。ホーソー



ンも他の短編で、「青白い顔の白人」といった表現を、先住民との関連で使っている。その例を見ておきたい。「大通り」(“Main Street”) (1849) では先住民の酋長 (red chief) のワツパカウエツト (Wappacowet) が、魔法を使って亡霊を操り、白人の移住者 (the pale-faced settlers) を怖がらせる (210)。「山の中の夕べのパーティー」(“Our Evening Party among the Mountains”) (1835) では、語り手が次のように言う。「僕たちは、インディアン (the red men) の出沒する土地の真ん中で今のような彼らの迷信を話題にしていたわけだが、白人たるぼくたちの心 (the hearts of the pale-faces) はそうした迷信に戦慄を覚えたりしない」(428)。ここで語り手は、一見突き放したようなものの言い方をしているが、インディアンの迷信を話題にすること自体、それに関心があることは否めない。これらの例から判断して、ホーソーンが白人の顔を“pale”と表現する場合、一方で先住民の存在を意識している可能性が高い。実際、先ほどのルーベンの顔が青白いと表現された2か所それぞれで、ルーベンがなんらかの形で先住民と関係していることが疑われる。

まず結婚後のルーベンの顔が“pale”と表現されていた場面に注目する。ルーベンは恋人ドーカスに、マルヴィンは埋葬したからと嘘をついて彼女と結婚するが、以来ずっとマルヴィンのことが頭から離れない。彼の場合、

埋葬されていない死体が、荒野から呼んでいるという思いが意識に上ってくる。

He was conscious ...that an unburied corpse was calling to him out of the wilderness. (25)

というのである。ここで、マルヴィンの死体であれば、“the”をつけて特定すべきところが不特定冠詞が使われている。ルーベンの空想に取り付いているのは、マルヴィンだけでなく、白人に殺され、埋葬されない無数の先住民の亡骸ではないのか。

次にルーベンが鹿狩りで息子を誤射したときの顔も「青白い」をさらに強調して「ひどく青白い (ghostly pale)」と表現されている場面に注目する。鹿狩りの最中のルーベンの様子は、彼がかつて先住民と戦っていたころの姿を髣髴とさせる。一家の森への移住が決まり、息子サイラスと「猟師の目で食料となる獲物を探しながら (watching with a hunter's eye for the game that supplied their food)」(27) 森を歩いていたときも、彼は植民地を出て、「野獣や野蛮人 (つまり先住民) だけのものである領域 (a region of which savage beasts and savage men were as yet the sole possessors)」(28) に入っていく。さらに、ルーベンは

木の幹の背後に潜んでいる敵でも探しているように、すばやい視線を前方のあちこちに走らせる。そして前方に何も見つからないと、追っ手でも恐れているかのように、背後に視線を向ける。

His quick and wandering glances were sent forward, apparently in search of enemies lurking behind the tree trunks; and, seeing nothing there, he would cast his eyes backwards as if in fear of some pursuer. (28)

そしてついに、ルーベンは森の中でサイラスに向けて誤射してしまうのだが、

猟師の本能に突き動かされたとはいえ、狙いはベテラン狙撃兵のそれだった。

...he fired, with the instinct of a hunter and the aim of a practiced marksman. (29)

ということは、彼は鹿を撃とうとして、本能的に「見えない敵」つまり先住民を撃とうとしたのではないか。皮肉にもそれは先住民でなく最愛の息子であったわけだが。さらにこうした仮説に関連して次のような描写に注目したい。

命中を知らせるものであり、獣ですらそれによって瀕死の苦痛を表すことができるような、そんな低いうめき声が聞こえてきたというのに、ルーベン・ボーンはまるで興味を示そうとしなかった。そのとき、どんな記憶が彼によみがえってきたというのだろうか。

A low moan, which told his success and by which even animals can express their dying agony, was unheeded by Reuben Bourne. What were the recollections now breaking upon him? (29)

つまり、このうめき声は「成功」つまり命中を意味しているが、動物が苦痛を表すときのうめき声であるとは断定されていない。それによって、動物以外、つまり人間のうめき声の可能性が示唆されている。にもかかわらずルーベンは「興味を示さず」、彼には数々の思い出がよみがえってきているという。これは彼が先住民の虐殺を良心の呵責を感じることもなく淡々と重ねていったことを暗示しているのではないか。

さらにルーベンが体験したこれより前の狩りにさかのぼってみる。彼は戦地から戻ると農民として暮らしていた。その後は一度、息子を連れて森に探検 (their expedition) (28) に行ったこともあるようだが、本格的な狩りをしていないのである。つまり、銃を持って本格的な狩りに出かけた最後の記憶とは、あの戦争におけるインディアン狩りであり、引き金を引いたとしたら、それはインディアンに対してであった。そこで、ラヴェルの戦いを終えた直後のルーベンの様子を思い出してみたい。

右手はマスカット銃をしっかりと握り締めている。顔面がヒクヒク激しく動くのをみると、眠っていても彼を含めてわずかしか生き残れなかった戦闘場面を思い出しているのであろう。

His right hand grasped a musket; and, to judge from the violent action of his features, his slumbers were bringing back a vision of the conflict of which he

was one of the few survivors. (19)

明らかに、ルーベンは今でいうところの PTSD（心的外傷後ストレス障害）を患っている。PTSD はその後も何度となく彼を悩ませ続けたに違いない。彼が久しぶりに銃を取ったとき、鹿を撃とうとして、そのむこうに先住民の幻影が見えたのも、無理はない。

ここで見方を変えると、先住民の亡霊は、ルーベンをそのように新たな虐殺行為に誘い込むことで、彼の分身とも言える息子を打ち殺させた。これこそ、最高の復讐を成し遂げたのである。

こうしてみると、ルーベンの顔が「青白い」と表現された2か所は、彼が先住民の亡霊に脅かされていることを示唆していると考えられる。ここで、再びフレノーの詩を参照したい。詩の中で、「狩人と鹿は一つの影である」(Freneau 808) というくだりがあった。たしかにそれらは実態のない影にすぎない。しかし頭ではそうわかっている「白人の理性は、その影に屈する」、つまり結局はその影に翻弄されるのである。フレノーもホーソーンも、いかに先住民との闘いが白人の心に暗い影を落としているかをテーマにしていると考えられる。

## 2. マルヴィンの亡霊

### (座った姿勢の死体が白人キリスト教徒に与える恐怖の本質)

次にルーベンとマルヴィンの亡霊の関係について考察を深めたい。フレノーの詩に登場する先住民の遺体は、楽しげで明るいのと対照的に、ホーソーンが描くマルヴィンの遺体は、ルーベンに恐怖を抱かせ、埋葬するよう迫って苦しめる。そこで、フレノーとホーソーンがおそらくともに理解していたであろう、先住民と白人の死生観の違いについて考えてみたい。フレノーの詩の、今度は前半部を引用する。

学者たちが何と言おうと、  
 なおも私は、持論に執着する  
 我々が死者を横たわらせるのは、  
 それが魂の永遠の眠りを示しているからであると。

In spite of all the learn'd have said,  
 I still my old opinion keep;  
 The posture, that we give the dead,  
 Points out the soul's eternal sleep.

しかし、この持論はこのあたりに古くからいる者たちには当てはまらない。  
 インディアンは、生きることから解放されると、  
 ふたたび、友人たちと座って、  
 楽しい食事を分かち合うのである。

Not so the ancients of these lands ——  
 The Indian, when from life releas'd,  
 Again is seated with his friends,  
 And shares again the joyous feast.

彼のために、鳥の彫像が作られ、鉢に盛られた鹿肉が描かれる。  
 というのも、これから美しく着飾って  
 死出の旅に出かけるわけだが、  
 それは魂の活動であり、決して休むことはないのだ。

His imag'd birds, and painted bowl,  
 And ven'son, for a journey drest,  
 Bespeak the nature of the soul,  
 Activity, that wants no rest.

彼の弓は、すでに攻撃に備えてしなり、  
 矢の先には骨の矢尻がついている。  
 それは、命は潰えても、  
 それより立派な魂は残るということを示している。

His bow, for action ready bent,  
 And arrows, with a head of bone,  
 Can only mean that life is spent,  
 And not the finer essence gone.

この道をやってきた、見知らぬ人よ、死者に対してごまかしはいけない。  
 しかし盛り土を見て、こう言うがいい。  
 彼らは横たわってはいない、ここに座っているのだと。

Thou, stranger, that shalt come this way,  
 No fraud upon the dead commit——  
 Yet, mark the swelling turf, and say  
 They do not lie, but here they sit.

[Freneau 1787 年版] (Bergland 39)

私＝白人が「死者を横たわせ」たとき、それが「魂の永遠の眠りを示している」と考える。つまり、生き残った者は、死者を横たわせることで、生の営みと死者の眠りとを峻厳に区別しているのがわかる。というのも白人が信じるキリスト教では、死者と生者は従来交わらないものというのが原則だからである。歴史学者デイヴィッド・E・スタナード (David E. Stannard) によると、とくにピューリタンの場合、「我々は、死者のことは死者に任せ、生者は生者で生きなければいけない」(103) という聖職者の言葉に象徴されるように、死者と生者をまったく別の次元に置いているという。

一方、先住民は、「生きることから解放されると、再び友人たちと座って、楽

しい食事を分かち合う」という。さらに、「服を着て」「旅にでかける。」つまり、生きていたときと同じように過ごせるのだという。次のスタンザであらためて、強調される。「彼らは横たわってはいない、ここに座っているのだと」。すくなくとも、生き残った者たちはそう信じている。そこには、死＝横たわること／生＝座ること、というような区別はない。生と死の間に決定的な違いは認めないのだ<sup>5)</sup>。先住民の死の捉え方はこのようにおおらかである<sup>6)</sup>。

一方、「ロジャー・マルヴィンの埋葬」のロジャーやルーベンは、辺境人とはいえ、死生観や埋葬に対する考え方において、フレノーの詩の中の白人の「私」に極めて近い。つまり彼らにとって、横たわるとは死の眠りを意味する。逆に座るといえるのは、生きている証拠である。このような考え方は、作品の随所に見られる。順にみていきたい。

まず、座る姿勢と生きている状態が結び付けられている場面に注目する。瀕死のマルヴィンは、太陽が昇ると、

力を振り絞って横になっていた身を起こし、座りなおした。

...so soon as the first ray of sunshine rested on the top of the highest tree, he reared himself painfully from his recumbent posture and sat erect. (18)

そして、彼はルーベンに改めて次のように言う。

ルーベンよ、この岩の下に俺たちは座っているんだが、こいつは老いぼれた獵師の墓にはもってこいだ。

“Reuben, my boy, ...this rock beneath which we sit will serve for an old hunter’s gravestone.” (19)

つまりあらためて、自分たちが座って＝生きていることを確認する一方で、自分の死期に近いことを、受け入れようとしている。そのマルヴィンを、若いル

ルーベンは次のように言って励ます。

はくが、食用になる草や根菜を森に探しに行ってくる間、ここに座って  
てください。

Sit you here while I search the woods for the herbs and roots that must be our  
sustenance. (19)

ここで「座ってください」というのは「生き続けてください」という願いがこめられている。またこのあと、マルヴィンはルーベンに、自分を置いて一人で開拓村をめざせと命じるが、それはできないと抵抗するルーベンに向かって次のように言う。

君が万が一、だれかを連れてきてくれたら、私は、もう一度自分の家の炉  
辺に座れるかもしれないんだ」

“Should you meet one of these and guide them hither, who can tell but that I  
may sit by my own fireside again?” (20-21)

ここでも、「座る」という表現は「生き残る」ことを意味している。

さらにルーベンやマルヴィンの意識の中で、「座る」だけでなく、「立ち上がる」、つまり地面から距離をとることが生きることにつながっていることがわかる。マルヴィンが一瞬力を取り戻す瞬間と、また力を失う瞬間を描いた次の場面に注目したい。

話しているうちに、マルヴィンは大地から立ち上がりかけました。そして、最後の言葉の持つエネルギーが、荒涼たる森を幸せなヴィジョンで満たしたように思われました。だが彼が力尽きて檜の葉のベッドに崩おれると、ルーベンの目に燃えていた光も消えました。



As Malvin spoke he almost raised himself from the ground, and the energy of his concluding words seemed to fill the wild and lonely forest with a vision of happiness ; but, when he sank exhausted upon his bed of oak leaves, the light which had kindled in Reuben's eye was quenched. (20)

マルヴィンが、立ち上がったとき、体は地面から最も離れた状態になり、一瞬生命力が回復したことがわかる。すぐまた地面に沈み込んでしまうのだが。若いルーベンも立ち上がり (raised himself from the ground) (21)、彼のほうは、そのまま出発の準備に取り掛かる。

またマルヴィンは、別れのとき、一旦その場を離れたルーベンをわざわざ呼び戻し、身を起こして岩に寄りかかせてくれと頼む。

“Raise me, and let me lean against the rock,” was his last request.

“My face will be turned towards home, and I shall see you a moment longer as you pass among the trees.” (23)

マルヴィンが何とか身を起こそうとするのは、最後まで生にしがみついていたという切なる願いからだと考えられる。そういえば、マルヴィンは昔、今のルーベと同じ状況に置かれたことがあり、そのときルーベと同様瀕死の仲間をその場に置いて、助けを求めに出発したのだが、その直前に横たわる仲間の枕を高くしてやっている。“I heaped a pillow of dry leaves beneath his head and hastened on.” (21) これも、彼の体と地面との距離、つまりは死との距離を少しでも置いてやろうという配慮と考えられる。

これほどまでに、登場人物が座ること、身を起こすこと、地面との距離を保つことに執着するのは、やはり横たわるのは死者の姿勢であるという白人独特の考えによるものだと考えられる。

さきほど、力つきたマルヴィンが枯葉の下に沈みこんでしまう場面 (he sank exhausted upon his bed of oak leaves) を見たが、ルーベンも命からがら森から脱出する途中で動けなくなり、そのときは、「木の下に沈み込み (sank down beneath a tree)」(23)、死を待つしかなかった、とある。やはり、体が地面に近くなるだけ、死は近づいてくるのである。

さらに、沈みこむだけでなく、横たわる姿勢が死と結び付けられている場面に注目してみる。ルーベンがマルヴィンに一人を出発せよと促されたときのせりふに注目したい。

おじさんがこんな寂しいところで死んで、埋葬もされず横たわるのを放っておくというのでしょうか。

Should I therefore leave you to perish and to lie unburied in the wilderness?  
(19)

また彼は、そんなことをすればマルヴィンの娘であり自分の恋人のドーカスに顔向けできないと考え、次のように言う。

そんなことをドーカスに伝えるくらいなら、あなたのそばに横になり、死んだほうがましじゃないですか。

Were it not better to lie down and die by your side than to return safe and say this to Dorcas?" (20)

さらに、いよいよマルヴィンを見捨てて立ち去るとき、良心の呵責に耐えかねたルーベンは、戻って岩のそばに横たわる (to return and lie down again by the rock) (23) ほうがいいのではないかと、つまりマルヴィンと一緒に死ぬほうがいいのではないかと一旦は考える。明らかに、ルーベンの意識の中で、死と横たわる姿勢は強く結び付けられ、さらに死んで横たわった死体は、かならず埋

葬されなければならないという脅迫観念に縛られているのである。“lie buried”が当たり前で，“lie unburied”はありえないことなのである。その後ルーベンは、かならず戻ってきてマルヴィンを助けるか、さもなければ墓に遺体を横たえ埋める (lay his body in the grave) ことを強く誓う (22)。そしてマルヴィン自身も「この荒野の岩に戻ってきて、墓に骨を横たえてお祈りしてくれ (“lay my bones in the grave”)」と頼むのである。さらに、ルーベンはのちにドーカスに次のようにいう。

ドーカス、天に祈るんだ。我々3人のうち、だれひとりとしてこの寂しい荒野で一人ぼっちで死に、埋められもせず、横たわることのないように。  
...neither of us three dies solitary and lies unburied in this howling wilderness!  
 (29)

つまり、ルーベンは、自分自身も、そして自分の家族も、死んだらかならず誰かに体を横にしてもらい埋めてもらうことを望んでいるのである。

遺体は横たえて埋葬するもの、このことは、生き残ったマルヴィンの意識にずっと取り付くのである。ここで気をつけたいのが、「ルーベンが、狂気じみて疼くような好奇心にかられてこっそり引き返し、熱心にマルヴィンの姿を見つめた ([Reuben] impelled by a wild and painful curiosity, gazed earnestly at the desolate man)」(22) ことである。この行為によって、ルーベンは座って祈っているマルヴィンの姿をあらためて目に焼き付けることになる。のちに彼は、二つの思いに引き裂かれる。一方で、

義理の父親が今でも生きていて、岩の根方の萎びた枯葉の上に座り彼の助けを待っている、そんな突拍子もない思いが付きまとして責めさいなむ。

It was a haunting and torturing fancy that his father-in-law was yet sitting at the foot of the rock, on the withered forest leaves, alive, and awaiting his pledged

assistance. (25)

他方、「最も冷静にはっきりした思考の中で」ルーベンが思い描く父親の姿はすでに横たわっている。

どこまでも広がる道なき森のどこを探せば、遺体が根元に横たわるあの碑銘の入った滑らかな岩が見つかるのか、知るよしもなかった。

Neither did he know where in the pathless and illimitable forest to seek that smooth and lettered rock at the base of which the body lay. (25)

ところが最後の誤射の直後のシーンで、再度、ルーベンには座ったままのマルヴィンが想起される。

この藪はロジャー・マルヴィンが今もそこに座っていたとしてもその姿を隠してしまったでしょう。

A thick covert of bushes...would have hidden Roger Malvin had he still been sitting there. (30)

つまり、通常は座って生きているか、体を横にして土の中に埋葬され死んでいるか、いずれかなのだが、死んだはずの者が座っていること、つまり死者が生死の境目を越境して、よみがえることは想像するだけでこの上ない恐怖であり、異常な心理状態のルーベンは、まさにこの恐怖を味わっているのである？

## 結 び

ここで改めて、この論文の冒頭で取り上げたルーベンの「迷信からくる恐怖」(superstitious fears)の正体を考えたい。この恐怖のために彼は森に一人入ってマルヴィンの埋葬をすることができないのであった。そこで、「迷信同様の関

心」という表現が使われている次の語りをもとに、この恐怖の正体をあきらかにしたい。

辺境の白人は、おそらく生きている者と同様、死者とも闘うという先住民の習慣に影響されてのことだろうが、埋葬の儀式に対して、ほとんど迷信と思われる考えを持っていて、先住民と戦い命を落とした者を埋葬しようとして、自分の命を犠牲にした例は数多くあった。

An almost superstitious regard, arising perhaps from the customs of the Indians, whose war was with the dead as well as the living, was paid by the frontier inhabitants to the rites of sepulture; and there are many instances of the sacrifice of life in the attempt to bury those who had fallen by the “sword of the wilderness.” (22)

辺境人が、生者と死者がともに戦う、つまり同じ次元にいるという先住民の死生観だけを受け入れていたなら、死者の存在を恐れなかったはずだ。しかし、これまでフレノーの詩とこの作品を関連づけたことで、ルーベンたち辺境人が一方で、死者と生者は交わらないというキリスト教に基づいた死生観の持ち主でもあることを確認できた。結果的に彼らは、一般のキリスト教徒よりも死者の影響力を強く信じ、それを「迷信」として切り捨てられないがために、キリスト教徒以上にその恐怖を感じてしまう。したがって辺境人は、死体は寝かせてよほど念入りに埋葬しておかないと安心できない。だからこそ、自分の命の危険も省みず、埋葬を優先させようとするのであろう。そう考えると、その直後に次のような語りが続くのものにも納得がいく。「ルーベンはそれゆえ、戻ってロジャー・マルヴィンの埋葬をするとおごそかに約束したことの重要性を十分感じていた」(22)。このようにルーベンは埋葬をしなければいけないという強い思いはある。それなのにやはり生と死の境界に漂うマルヴィンの亡霊が怖くて死体に近寄れない、これは先住民とキリスト教徒の中間の、辺境人ならではの

のジレンマといえる。

ルーベンの恐怖の源は、マルヴィンの亡霊だけではない。先に見たように、彼は白人が戦いで虐殺し、荒野に放置してきた無数の先住民の亡霊にも同じような理由で怯えているのである。

さらにここで、作品の舞台となる18世紀と作品が世に出た19世紀の死生観の変遷について注目してみたい。エリック・R・シーマン (Erik R. Seeman) によると、第二次大覚醒の時期 (19世紀初頭) 以降、プロテスタントの信者の間で、死後の世界にたいする楽観的な解釈が支配的になり、天国は孤独な場所ではないし、地獄も怖いところでないと考えられるようになった。つまり死に対する恐怖はこの時期から軽減されていくのである (Seeman 294-93)。そこでホーソンがマルヴィンの死の恐怖を演出するために、わざわざ18世紀を舞台に選んだとも考えられる。

以上のように、フレノーの詩を参考にして、ホーソンの作品にみられる先住民の虐殺という十字架を背負った辺境人の意識や、辺境人独特の死生観を掘り下げて考え、ルーベンの強迫観念を明らかにした。今後フレノーの詩がホーソン以外の19世紀のアメリカ人作家にどのような影響をもたらしたのかを研究する余地は残されている<sup>8)</sup>。また、アメリカのさまざまな人種の死生観と埋葬との関係、さらに文学との関係は、20世紀には、ウィリアム・フォークナー (William Cuthbert Faulkner) の『死の床に横たわりて (*As I Lay Dying*)』(1930)<sup>9)</sup> やトニ・モリソン (Toni Morrison) の『愛されし者』(*The Beloved*) (1988) などに引き継がれる魅力的なテーマとなりえている。

\*本稿は、日本・ナサニエル・ホーソン協会第28回全国大会 (2009年5月29日於：日本大学) のワークショップで発表した原稿に大きく加筆修正を施したものである。

## 注

- 1) 「ロジャー・マルヴィン」の日本語訳は、これ以降、国重純二訳を参考にした。
- 2) フレノーのこの詩は、版によって、カンマ、ダッシュの有無や言葉遣いに違いが見られる。ここでは、バークランドの批評書から、“Lines Occasioned by a visit to an old Indian Burying Ground”と題して最初に発表された版を使用した。1979年のノートン版では、第4スタンザ（本稿13頁）の“head of bone”が“head of stone”に、“finer essence”が“old ideas”に変更されている。
- 3) 「ロジャー・マルヴィン」の場合、物語が始まってすぐ、次のような説明がある。「二人（ロジャーとルーベン）の頭上には15ないし20フィートはありそうな滑らかで平たく重量感に溢れる花崗岩があり、それは巨大な墓石に似てなくもなく、その石目は忘れられた文字で書かれた碑文のように見える。このあたりの木といえば普通は松なのだが、岩の周辺数エーカーの区域では樫をはじめとする堅木の類が松にとって代わっていた。一本の精力に溢れる若い樫が旅人のすぐ側に生えていた」。すでにこうした岩と木の設定にフレノーの作品との共通点が認められる。
- 4) OED 参照。“pale face”の初出は G. A. McCall による 1823 年の手紙（1868 年に出版された書簡集 *Letters from Frontiers* の中に収録）。インディアンの酋長が白人に対して“Ah, Pale face! What brings you here?”と言ったと記されている。この3年後にクーバーは、先住民のせりふとして“pale face”を使う。以下に引用。“The pale faces make themselves dogs to their women,” muttered the Indian, in his native language,.... さらに1841年、pale-facedという形容詞が G. Gatlin の書簡に初めて登場する。“The Indian’s inferiority... to their pale-faced neighbours.” ホーソーンが「大通り」の中で、“pale-faced settlers”という表現を使ったのは、その8年後の1849年である。
- 5) この解釈は、文化人類学的な裏づけもできる。H. C. Yarrow や Anthony F. C. Wallace は座った姿勢のまま埋葬する部族、完全に埋葬せずあえて墓の穴を開けたままにする部族の例を紹介し、その背景にある、死者が自由に生者のもとに戻れるといった死生観を明らかにしている。これに関しては、辻「フレノー、ホーソーン、ポーが描く埋葬の物語」にまとめたので参照されたい。  
 なお、座った姿勢で埋葬する理由ははっきりしていないが、New France にいた先住民の説明によると、「母親の子宮の中にいる胎児と同じ姿勢にするため」であるという (Seeman 170)。つまり人間は死によってふたたび生まれる前の状態に戻っていくといった発想があるようである。
- 6) フレノーの詩からおよそ200年後の1984年、先住民ラコタ族のメディスンマン、ブラック・エルク (Black Elk) の語りを収録した本『第六祖父』(*The Sixth Grandfather*) が出版されるが、そこにも似たような死生観が表現されている。ブラック・エルクによると死者はしばらく亡霊になってこの世に漂っているようである。彼の証言集の中には、生きている者が死者の霊にタバコをやる場面が紹介されている。(346-67)。

- 7) この死者と生者の間の峻厳な区別は、埋葬の儀式やその姿勢だけでなく、食事に関しても然りである。フレノーの詩の中の先住民の埋葬では、死者に食事を与えることは重要な意味を持っていた。食事を通して、死者と生者が自由に交わりあえていた。一方、ルーベンが出発の準備をするとき、まず最初にしたのがロジャー・マルヴィンの食事に近く根菜や食用の葉を取ってくることであった。その食料は「ムダな供給」“useless supply” (21) と呼ばれている。ここには、回復の見込みのない者やすでに死んでしまった者には食べ物がいらぬという、キリスト教徒特有の考えが根底にある。さらにドーカスが家族のために心をこめて用意した食事も結局、無駄になったことが暗示されている。3人の因縁は二度と再現されることはないのだ。こういった考え方は、死後も楽しい食事を取るという先住民の発想と対照的である。
- 8) フレノーの詩との関連を本論とは全く別の観点から言及している批評家に、James McIntosh と Paul S. Juhasz がいる。引用文献参照。
- 9) フォークナーのこの作品では、母親の死体をめぐる家族の様々な反応が描かれるが、とくに長男キャッシュ (Cash) は死者を生者と厳格に区別するキリスト教の死生観にとらわれているといえる。彼は死者を完全に密閉するための完璧な棺を作ろうとする。そしてその棺が常に水平に保たれていることにこだわる。つまり、母親が常に横たわった状態であることを望むのである。しかし皮肉にもキャッシュの努力が無になることが三度起こる。まず四男バーダマン (Vardaman) が、棺にいくつも穴をあけてしまう。さらに棺が家族の手で母の望む埋葬場所へと運ばれる途中、大きく傾いたり、ほぼ垂直の状態になったりするのである。

なお、バーダマンが棺に穴をあけた理由だが、彼は密閉された棺の中では母親が呼吸できなくなると心配する。一見稚拙な考え方だが、注5)で述べたように、先住民の中には、死者を生者と同じように扱い、彼らが自由に出入りできるように、墓の周囲に穴をあけておく部族がいる (Wallace 99)。バーダマンはその死生観に近いともいえる。フォークナーの作品分析に関しては稿を改めたい。

## 引用文献

- Bergland, René L. *The National Uncanny: Indian Ghost and American Subject*. Hanover: Up of New England, 2000.
- DeMallie, Raymond J. ed. *The Sixth Grandfather: Black Elk's Teachings Given to John G. Neihardt*. Lincoln: U of Nebraska P, 1984.
- Freneau, Philip. "The Indian Burying Ground." *The Norton Anthology of American Literature* Vol 1 New York: Norton 1979. 807-08.
- Hawthorne, Nathaniel. "Main Street." *Nathaniel Hawthorne's Tales*. New York: Norton, 1987. 209-230.
- . "Roger Malvin's Burial." *Nathaniel Hawthorne's Tales*. New York: Norton, 1987.



17-32.

———. “Sketches from Memory : Our Evening Party in the Mountains” *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne Vol. X*, Athens : Ohio State UP, 1974. 425-429.

Juhasz, Paul S. “The House of Atreus on the American Frontier.” *The CEA Critic* 68, 3, 2006.

McIntosh, James. “Nature and Frontier in ‘Roger Malvin’s Burial’.” *American Literature* 60.2 (1988) : 188-204.

Stannard, David E. *The Puritan Way of Death : A Study in Religion, Culture, and Social Change*. New York : Oxford UP, 1977.

Wallace, Anthony F. C. *The Death and Rebirth of the Seneca*. New York : Vintage Books, 1967.

Yarrow, H. C. *Mortuary Customs of North American Indians*. Forgotten Books, 2008.

岡田量一『ホーソーンの短編小説：文学・愛・実存』北星堂書店，1996年。

国重純二訳『ナサニエル・ホーソーン短編全集Ⅰ』南雲堂1994年。

辻 祥子「フレノー，ホーソーン，ポーが描く埋葬の物語：先住民と白人の死生観の比較」  
松山大学言語文化研究 第28巻第2号，2009年。181-88。

松坂仁伺「「ロジャー・マルヴィンの埋葬」と前テキストとしての聖書」『ホーソーン研究：  
前テキストの美学』旺史社1995年。